

情報センター職員の情報交換をめざして

大阪工業大学 情報センター／情報科学部 中西 通雄

E-mail: naka@is.oit.ac.jp

あらまし ACM SIGUCCS (Special Interest Group on University and College Computing Services) の秋期会議の参加報告を中心として、日本における情報センター等の技術職員が情報交換するための組織化について提案する。上記の秋期会議は、米国の大学の情報処理センター/メディアセンターなどで働く職員(教員というよりも事務職員や技術職員を中心)の情報交換を中心としたものであり、発表しやすいような支援体制がいろいろと工夫されていた。日本でもこのような会議を組織できないだろうか。CIECとして何ができるか考えたい。

キーワード 情報センター, メディアセンター, SIGUCCS

1. SIGUCCS Fall Conference

1.1 会議の目的

ACM (Association of Computing Machinery) の研究会の1つとしてSIGUCCS (Special Interest Group on University and College Computing Services) がある。2005年11月6日～9日にカリフォルニア州モンタレーにおいて、このSIGUCCSが主催する会議 "Fall Conference 2005" が開催された¹。この会議は、高等教育機関の情報センターやメディアセンターなどにおいてシステムを構築し運用しているスタッフや、学生・研究者向けヘルプデスクのスタッフのための情報交換を目的として、1973年から毎年秋に米国またはカナダで開催されている。今年は、11月5日～8日にカナダのアルバータ州エドモントンにおいて開催される²。

なお、マネージメントの人たち(例えば、大学の情報化担当責任者、Chief Information Officer, プロジェクトリーダーなど)向けには、CSMS (Computer Services Management Symposium) という会議が毎年春に開催されている³。

1.2 発表件数など

今回の Fall Conference の参加者は約450名、口頭発表が約80件(パネルディスカッション形式を含む)、ポスター発表が約20件であった。このうち日本からの参加者は11名で、発表は5件である。

口頭発表は、「利用者サービス部門」、「利用者支援」、「スタッフ管理・組織管理」、「テクノロジー」、「トレーニング・教育」などのセッションに分かれて行われた。本稿の著者は、梶田が大阪大学サイバーメディアセンターの教育用計算機システムで構築したディスクレスLinuxシステムの技術に関する発表[1]、および、山之上らの情報倫理ビデオ教材小品集の発表[2]に共著者として参加した。なお、後者は、コミュニケーション賞ビデオ部門の第2位を獲得した。

各セッションの発表テーマ、日本からの参加者の発表概要、前日のチュートリアルについては、文献[4]に約5ページにわたって記載されているので参照されたい。

1.3 発表までの支援

発表申込段階では、300 words 程度の簡単な概要を送るだけである。アクセプトされると、予稿集(CDROM版だけで、冊子体は無い)に載せる原稿を書いて送る。送った原稿が2～3人で査読されるころまでは他学会と同じであるが、「こう直した方がよい」、「私だったらこう書く」といった細かい修正方法まで指示してくれる。修正して再送付すると、また修正してくれる。こうして、カメラレディ完成まで2～3度の往復があった。

2006年11月開催分の予稿作成においても、同様の方法で原稿のチェックが行われている。つまり、SIGUCCSでの発表者は、論文形式の文書を書いた経験が少ない、という想定をしているようであり(確



¹ <http://www.siguccs.org/Conference/Fall2005/>

² <http://www.siguccs.org/Conference/Fall2006/>

³ <http://www.siguccs.org/Conference/Spring2006/>

認したわけではない), 丁寧に指導してくれているわけである。

1.4 メンター制, ゲーム

SIGUCCS の会議に初めて参加する人には, 2 度目以上の参加者がメンターとして割り当てられおり, 「何でも相談するように」という連絡が会議参加前にメールで通知された。

また, 会議の前日には, "5km Fun Run and Walk" という散歩(ちゃんと走った人もいる)があった。夜には, 初参加者のための歓迎会で, 簡単なゲームが行われた。このゲームは, 「ハイブリッド車を持っている人」, 「外国からの参加者である」, 「猫を飼っている」, 「コンピュータサイエンスの出身者」などの条件が 5×5 のます目に書かれた紙を渡されて, 条件を満たす参加者にサインをもらい, 早く全てのます目を埋めると商品を貰えるというものであった。これにより多くの参加者と知り合えるように考慮されていた。



1.5 発表の評価シート

発表の方法は一般の研究会とほぼ同じであるが, 1 件の発表を二人で分担してプレゼンしているものもいくつか見受けられた。セッションの聴講者には, A5 版の評価シートが配布される。大学の授業で時々使うミニツツペーパーのようなもので, 「発表内容がわかりやすかったか」, 「自分の役にたったか」, 「自分の関与するコンピュータ教室で採用したいか」などの 5 つ程度の項目を 5 段階で評価し, さらにコメントも自由記述できるようになっている。そのシートは, セッション終了時に発表者に渡される。予稿の修正といい, こういったところにも, 発表者を育てていこう, もしくは一緒に育てていこうという協調の姿勢が貫かれている。

1.6 表彰

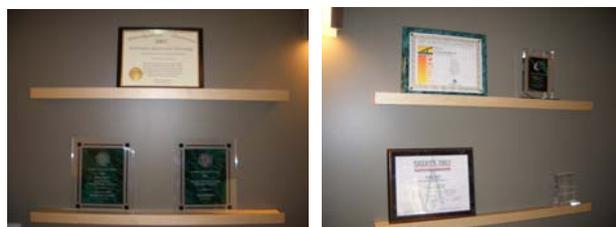
次に示す 9 部門 (Web サイト, ニュースレター,

活動推進のためのパンフレット・ビデオ・カレンダー等) の優れた実践に対して, それぞれ 1 位~3 位まで賞状が送られる。

- Computing service web site
- Student employee web site
- Printed computing newsletter
- Electronic computing newsletter
- Printed instructional classroom materials
- General service promotional materials
- Promotional Video
- Student created promotional materials
- Software CDs

結果は 1 位該当無しという部門もあったが, こういった実際の運用を評価してもらえるのは, 技術スタッフ部門にとって励みになるし, 昇進などにも考慮されると思われる。

この会議の中でカリフォルニア大学バークレー校のコンピュータセンターのスタッフと知り合ったので, 会議終了後にセンターを訪問した。スタッフの所属部門の入り口に SIGUCCS の賞状が 2 つとその他の賞がいくつか飾られていたのが印象的であった。



2. 日本におけるセンター職員研修の現状

2.1 学会系研究会など

日本において情報処理センター・メディアセンター等の運用に関連した発表をする場合は, 情報処理学会分散システム研究会(DSM), 同学会コンピュータと教育研究会(CE), 教育システム情報学会, 情報処理教育研究集会, 私情協全国大会などがある。電子情報通信学会ではあまり発表されていない。これらの会合では, 教育用計算機システムの設計や構築方法も発表されているものの, そのほとんどは技術を中心としたものであり, 多くの場合, 技術系職員ではなく教員が発表している。もちろん, 教員が主になってセンターの計算機システムを構築・運用している場合が多いためと考えられる。

2.2 文部省主導の技術職員研修

技術職員の情報交換の機会が無いわけではない。例えば、国立大学等では以前から学内での技官研修が行われており、平成 11 年度からは、「国立学校等地区別技術専門職員研修実施要項」に従って、地区(北海道, 東北, 関東・甲信越, 東海・北陸, 近畿, 中国・四国, 九州)ごとに、①機械, ②電気電子, ③情報処理, ④物理・化学, ⑤生物・生命科学, ⑥土木・建築の 6 分野で、4 日間の技術職員研修が文部省(当時)との共催で実施されるようになった⁴。研修を受けたことを人事記録に残し、昇格等の裏付けとするという性格のものである。筆者の一人は平成 7 年度から大阪大学の技官研修に参画し、平成 12 年度近畿地区技術職員研修の情報処理分野の企画に携わった⁵。上記の実施要項では、大学行政上の諸問題、学術研究の振興と国際交流、職場の安全管理、技術職員の役割(先輩講話)を入れることとなっており、さらに施設見学なども含めると、少なくとも情報処理分野の場合、実際の技術や運営に関する発表および討議の時間は不十分と言わざるを得なかった。実際、参加者の中には、研修が役に立たないという本音を漏らす人もいた。国立大学法人化後には、インターネット上に開催通知が見あたらないことから、開催されていないと思われる。

2.3 技術職員中心の研究会

大学の技術職員が中心となって、主に規模の大きな大学が主催者となって開催している研究会もある。例えば、平成 17 年 3 月には、「大阪大学総合技術研究会」が開催された⁶。この実施要項によれば、「発表内容も通常の学会等とは異なり、日常業務から生まれた創意工夫、失敗談等を重視し、技術者の交流および技術向上を図ることを目的」としている。研究会は、工作技術、装置技術、回路・計測・制御技術、極低温技術、情報・ネットワーク技術、生物科学技術、分析・評価技術、教育実験・演習指導の 8 つの技術分野にわかれて同時に開催された。全国各地から 600 名を超える参加者がおり、240 件を超える発表があった。1 日目は午後開始、2 日目の午後 3 時終了として、

多忙な技術職員も 1 泊 2 日で参加できるように配慮されている。

ただ、さすがにこれだけの規模で実施することは開催校に負担が大きい。平成 17 年度は、大きく 3 つにわけて、機器・分析技術研究会が岩手大学で、実験・実習技術研究会が鳥取大学で、機械・ガラス工作技術、回路技術、極低温技術、計算機技術、装置技術の 5 つが分子科学研究所で、それぞれ 2 月から 3 月にかけて開催された。

また、情報系だけの研究会として情報技術研究会が、平成 18 年 8 月 31 日～9 月 1 日に九州工業大学で開催される⁷。近隣の大学等から 11 件発表が予定されている。

3. 研究会ないしシンポジウムの提案

先に紹介した大阪大学総合技術研究会では、文部科学省の共催という形をとっていない。文部科学省からの制約をうけずに技術職員の皆さんが自らの役に立つような企画を考えて進めておられることは、以前に文部省主導の技術職員研修実施計画の立案に関わった経験から言えば、非常に良いことである。

ただし、現在は、数個の分野で一緒に開催しているため、情報・ネットワーク分野(もしくは計算機技術分野)だけを見ると参加者数も限られている。情報交換をさらに進めるためには、独立した研究会として、大学などの情報センター職員に限らず、公立の初等中等教育学校のネットワークを管理する教育センター職員も含めて、情報交換や人的ネットワークを構築できるような機会を設けていくことが必要と考える。

課題としては、開催資金と参加者旅費の問題がある。開催資金については、本来参加費で賄うことが原則であるが、規模が大きくなると金銭的支援をしてくれる母体が必要になる。また、参加者旅費については、事務系技術系職員の旅費は非常に限られているため、各所属組織で予算化してもらう必要がある。国立大学法人化により、これは従来よりも融通がきくかもしれない。

予算化のためには、研究会として大学および文部科学省に意義のあるものとして認知してもらうことが必要であるが、研究会の内容については技術職員が自主性をもって決定できるような現

⁴ <http://research.kek.jp/people/yashiro/engineer/kisoku/BJS51.html>

⁵ <http://www.shiga-med.ac.jp/~gijutsu/osirase/2sennmo.htm>

⁶ <http://tech2005.sci.osaka-u.ac.jp/>

⁷ <http://www.tech-i.kyutech.ac.jp/giken2006/>

在の体制を維持したい。ここに、電子情報通信学会、情報処理学会、CIECなどの学術団体が支援することを考えたい。

さらに、技術系職員にも学会に加入してもらい、学会の中でコンピュータシステムの運用について、教員と一緒にその知見を共有していくようにすることが望まれる。なお、学会費についても何らかの割引制度も検討すべきかもしれない。

4. おわりに

SIGUCCSは、教員というよりむしろ職員を主な対象とした研究会である。このような組織が30年以上前からACMという大きな学会の一部として設置されていることは意味がある。会議も長年にわたる運営経験が生かされて、人的ネットワークを構築しやすいように配慮されていた。日本の技術職員がこういった会議に参加することは現実には非常に難しいので、参加した教員が運営ノウハウを吸収し、日本での同様な会議の開催に役立てていただければ幸いである。教員側としても、技術職員の発表をサポートすることにより、技術職員の発表スキル向上が見込めるだけでなく、トータルとしてセンターのサービス向上にも繋がるものと期待できる。PCカンファレンスの中に、こういった特別セッションを設けるなり、CIECに準会員のような制度をつくるなりして、人の輪を広げ、運用ノウハウの共有をはかる試みをしてはどうだろうか。会員の皆様のご意見をお伺いしたい。

謝辞：本稿の主旨は、SIGUCCS会場での梶田秀夫(京都工芸繊維大学)、山之上卓(鹿児島大)、辰己丈夫(農工大)、村田育也(北海道教育大)、市川本浩(奈良先端大)、江藤博文(佐賀大)、大谷誠(佐賀大)の各氏との議論がベースとなっている。ここに記して御礼申し上げる。

また、本稿の一部は、平成18年度科学研究費補助金基盤研究(C) 課題番号17500050「OS設定やサーバ構築教育のためのセキュアな計算機システム環境」(代表:中西)の支援を受けている。

本稿は、発表予稿[3][5]をもとに加筆修正したものである。

文 献

- [1] 梶田秀夫, 齊藤明紀, 安留誠吾, 中西通雄: "Diskless Linux System with unionfs for an Educational Computer Center", ACM SIGUCCS, CDROM, Nov. 2005.
- [2] 山之上卓, 中西通雄, 中村純, 布施泉, 村田育也, 深田昭三, 多川孝央, 辰己丈夫, 岡部成玄, 山田恒夫: "Digital Video Clips Covering Computer Ethics in Higher Education", ACM SIGUCCS, CDROM, Nov. 2005.
- [3] 中西通雄, 梶田秀夫: "情報センター職員のためのシンポジウムを組織しませんか—ACM SIGUCCSへの参加報告と提言—", 近畿情報教育連合第7回合同研究会報告集 pp.17-18, Nov. 2005.
- [4] 山之上卓, 中西通雄, 辰己丈夫, 村田育也, 梶田秀夫, 市川本浩, 江藤博文, 大谷誠, 千葉正喜, 小池英勝: "ACM SIGUCCS Fall 2005 Conference 参加報告", 情報処理学会研究報告 CE(コンピュータと教育研究会) 2005-CE-83, Feb. 2006.
- [5] 中西通雄, 梶田秀夫: "情報センター職員のための情報交換を進めるために", 電子情報通信学会 技術と社会・倫理(SITE)研究会 pp.47-50, Feb. 2006.